

— 告 白 —

KIT  
キャンパス  
レポート  
文・出島二郎  
マーケティングプランナー



久島 康嘉 くしま よしこ  
金沢工業大学大学院工学研究科  
機械工学専攻  
修士後期課程一年  
福井県立高志高等学校出身

## 高校からの陸上部での経験が 研究テーマにつながりました。

取材の初めに、小学生のころの夢が博士になること、の一言が飛び出したので驚いた。未は博士か大臣か、というフレイズは死語かと思っていたのに。久島さんは年の離れた二人の兄が博士号を持っている家庭で育ったから、それは自然なことであったのだ。ただし、高校では進学の目標が定まらず、陸上競技にのめり込んでいた。

「学部三年のとき河合先生の授業を聞いて、それがやりたいとなりました。修士論文は『機能的電気刺激によるペダリング運動の速度制御に関する研究』でした。脳卒中や脊椎損傷などによって麻痺をかかえている人のリハビリを目的として、自転車をこぐときに電気刺激を行うというものです。リハビリ支援システムの構築と制

御を組み合わせた研究は、日本の大学では他にないんですよ。」

河合宏之准教授の専門は、ロボット制御工学、身体の運動制御。二〇一三年にフロリダ大学客員研究員をされ、そのときのテーマが、人の身体をシステムの一部分とらえたヒューマンモーションコントロールで、久島さんを修士後期課程へと導いていくことになる。

「河合先生とは、一生のおつきあいになると思いますね。まだ四十歳かな。フレンドリーで学生との距離感が近いんです。それに面倒見のよさ。声かけというか、よく学生を気にかけてくれますね。研究の実験では、最初に協力を受け入れてくれた石川県済生会金沢病院へ出かけています。今夏、IEEEのAIMという国際学会で発表しましたが、英語に関して経験が少ないと思いました。」

久島さんは父親の仕事の関係で、四歳までアメリカにいた。帰国後

も英語の勉強をさせられていた。でも、海外で働くならば、三カ国語くらいは話せないとダメだと痛感したのである。日常会話をこえたアカデミックな世界では。

「陸上部では幅跳びがメインで短距離もやっていたんですよ。だから障害のある方が自分の身体で何かできるという体験をさせてあげたいですね。今は研究と自分の意志が融合したので、楽しくやっています。大学の先生か企業での開発か、まだ先は見えませんが、留学も視野にいれています。」

久島さんは言葉を選びながら、ゆつくりと話してくれる。河合研究室の珈琲担当らしいが、そのコーヒーブレイクには濃密な会話が交わされることだろう。私は、恩師と愛弟子の信頼に満ちた一時を共有してみたいと思った。

**金沢工業大学**  
石川県野々子市扇が丘七二一  
電話番号(〇七六)二四八二〇〇